


 受賞の言葉

おおた そういち

87年京都大卒。96年英ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス博士課程修了。経済学Ph.D.を取得。05年より慶応義塾大経済学部教授。64年生まれ。



「若年雇用」視野広げ議論を

慶応義塾大学教授 太田聡一

この書物は、若者の労働市場を経済的な視点から分析した概説書である。フリーター、ニート、氷河期世代といった言葉が広く人口に膾炙するようになったことが示すように、1990年代以降の若者を取り巻く雇用環境はきわめて厳しいものであった。最近でも、新卒就職率は低迷しており、なかなか大きな改善が期待しにくい状況にある。

私は、1990年代後半から、若者失業率の上昇や離職率の高まりは、若者の意識変化にあるというよりも、企業による若年正社員採用の減少によってもたらされたものだと指摘してきた。その後は、主にそのメカニズムの解明に焦点を当てて分析を行ってきた。とりわけ、なぜ日本企業（とくに大企業）は若年者を採用の主なターゲットとしているのか、なぜ景気後退期に急激な若年採用の抑制を行うのか、さらには、それらはいわゆる「日本的雇用慣行」とどのような関連があるか、といった問題に焦点を当てて、少しずつ論文を発表してきた。

また、玄田有史氏（東京大学）、近藤絢子氏（法政大学）と共同で行った研究では、卒業時に不況であったときに若年者が被る経済的損失を分析したが、そこでも日本企業の採用行動が氷河期世代発生の鍵となることがわかり、研究の方向性について自信を得ることができた。

結局、若年雇用問題の大きな部分は、企業の採用行動の変化がもたらしたものであり、そこには社内での人材育成を重視する日本企業が、経済の先行きに自信を失ったという問題が横たわっているという基本認識にたどり着くことになった。それと法制度や教育問題などが絡み合って、非常に複雑な様相を呈しているのが、今の若年労働市場ではないかと考えている。

本書では、そのような見方を中心に据えて、できる限りわかりやすく若年労働市場の現状を概観しようとした。これまで若者の行動や教育との連関などに焦点を当てた研究は多かったが、企業行動に重点を置いて若年雇用問題を論じた書物は少なかったことが、今回の榮譽につながったと考えている。この受賞を励みに、さらに視野を広げつつ知見を深めていきたいと考えている。